萩市立萩図書館蔵『浜松中納言物語』について

赤迫　照子

A study on Text of *Hamamatsu chunagon monogatari* :Hagi City Library version

Shoko AKASAKO

はじめに

前稿[1]に引き続き、『浜松中納言物語』写本の調査結果を報告する。

萩市立萩図書館所蔵の『浜松中納言物語』写本（資料番号三甲三ロ111。以下、「萩本」）については、『国書総目録』や小松茂美氏『校本浜松中納言物語』（以下、「校本」。二玄社　昭39）に記載はないが、国文学研究資料館の「日本古典資料調査データベース」にて調査カード画像が公開されており、それによって一通りの書誌情報は確認できる。しかし、その伝本系統や来歴はこれまで言及されてこなかった。そこで、実見によって判明したことを記す。また、旧蔵者についても述べる。

一、書誌

巻三のみの一帖。帙なし。列帖装。渋引横刷毛文表紙。鳥の子砂子。外題は表紙左上に打付書で「濱松物語」とある。内題なし。奥書なし。書写者不明。前遊紙一丁、墨付六十六丁。本文毎半葉10行、和歌改行2字下げ。四十五丁裏のみ9行書き。表紙に貼紙「萩圖書館圖書／部門　三甲五ロ／番號　十四八／冊數　一」「楢崎時太郎氏保管」あり。墨書の部分「三甲五」「一四八」「一」「楢崎時太郎」は同筆であり、図書館受入時に書かれたものである。取消線・訂正は鉛筆で、他は朱印による。墨付第一丁表右上に蔵書印「國氏家藏」（朱）、「萬倉」（墨）。書入は見せ消ちによる訂正や補入による傍書（墨書）で、全て本文と同筆。異本注記なし。虫損あり。江戸時代末期写。

二、丹鶴叢書本との比較

池田利夫氏が解明されたように[2]、現存する写本群には共通脱行箇所があり、その箇所や数によって伝本系統が判別できる。巻三の共通脱行箇所は五十三箇所あり、萩本を調べてみたが、萩本には共通脱行箇所が一箇所もない。このような本文を持つのは、版本であるF系統／乙類第三種[3]の丹鶴叢書本しかない。したがって、萩本は丹鶴叢書本の転写本である。

影印本である『定本丹鶴叢書』[4]の巻三と萩本を比較したところ、転写の過程で表記が改められた箇所が多く見られた。いくつか例をあげる。

丹：あらはれ給へるにやと見一本○おとろかれて（上二ウ1）

萩：あらはれ給へるにやとみおとろかれて（二オ5）

丹鶴叢書本は五本の写本を校合したもので、傍に所々「一本」と他本注記が施してある。萩本はその注記を適宜、本文化させたようである。ちなみに『校本』によれば、「みおとろかれて」とあるのはA系統／甲類の彰考館文庫本である。

二〇一三年十二月二十日（受理）

赤迫　照子　　宇部工業高等専門学校一般科准教授

丹：さるさまに（上三7）

萩：さるよに（三オ9）

これも丹鶴叢書本の傍注が本文化したものである。「さま」を「よ」とする他本があるという丹鶴叢書本の注記を、萩本は採用している。「さるよに」という本文を有するのは、『校本』によればやはりA系統／甲類（榊藤前進彰小天琴）[5]である。

ところで、『校本』「校本編」四四四頁・「解説編」八五頁において、丹鶴叢書本本文に「こゝろさし」とあり、諸本の多くが有する本文「心さしいみしうとも」とは異同があるとの指摘がある。『校本』はここを巻三においてわずかに認められるF系統／乙類第三種（育由保百丹）の特徴的な箇所だとするが、[6]『定本丹鶴叢書』には「こゝろさしいみしうとも（下七ウ10）」とあり、萩本も「心さしいみしうとも（四十一オ7）」とある。『校本』の記載と『定本丹鶴叢書』には、他にも相違が散見された。『校本』は筆舌に尽くしがたい偉業であるが、時代の推移によって情報環境が整い、丹鶴叢書本をはじめ諸本の確認が容易になってきた今、『校本』の改訂に取り組むべきであろう。

丹鶴叢書本と表記が異なるものは少なくない。たとえば、『定本丹鶴叢書』には「帥のみやの（上四ウ9）」とあるが、萩本には「そつの宮の（四オ10）」とある。転写の過程で「帥」字が仮名書きされたのであろう。

独自異文も存するが、目移りによる脱落や誤記がほとんどである。

丹：とりのねたによのつねなるは（上一ウ9）

萩：とりのねなるは（一ウ4）

このように短い脱落はいくつもあり、長いものでは次のようなものがある。

丹：なけのひとくたりをなとかうけ給は（か一本）○さるへき人の思ひ聞えさせたるほとよりはなさけなう（上二十九オ7）

萩：なけのひとくたりはなさけなう（二十七ウ10）

丹：よろつの事のこりなうかたらひきこえ給をかうやうけんの后の御事（下二十六ウ10）

萩：よろつの事きの御事（五十八ウ2）

丹：こゝろえ思給か此月比はすゝしうて今なんこゝろをしつめてほとけをひとへに（下三十一ウ8）

萩：心え思給かひとへに（六十二ウ8）

古写本の面影を残す本でなかったのは残念だが、萩本の正体は明らかにできた。現在、『浜松中納言物語』の写本は約四十点確認されているが、丹鶴叢書本の転写本だと判明したのは、この萩本が初めてである。つい古写本の行方ばかりを気にしてしまうが、丹鶴叢書本が誰にどのように読まれたのかについても、『浜松中納言物語』享受の一様相として目配りしていく必要があろう。

三、旧蔵者國司氏について

蔵書印「國司家藏」「萬倉」は、萩藩毛利氏の重臣で長門国厚狭郡万倉（現在の山口県宇部市万倉）の領主であった国司氏のものである。国司氏の祖は高氏である。観応の擾乱（一三五〇～二）において高師直・師泰兄弟をはじめ高一族は謀殺されたが、師泰の子師武は所領の安芸国高田郡国司荘に逃れ、そのまま住して国司氏を名乗った。以後、毛利氏の家臣となり、家老や老中などの重職を任じられる「寄組」の地位に属す。関ヶ原の戦いの後、減封された毛利氏が周防・長門に移ったのに従い、国司氏も周防国佐波郡徳地伊賀地村（現在の山口市徳地伊賀地）に屋敷を構えた。寛永二年（一六二五）、国司就正（生没年不詳）のとき、領地替えで長門国厚狭郡万倉伊佐地（現在の宇部市奥万倉伊佐地）に居を移し、菩提寺の宗叶寺（現在の天龍寺）を建立する。なお、八代当主元武（不明～慶長十五年〈一六一〇〉）と九代当主元蔵（不明～慶長十三年〈一六〇八〉）は伊賀地の西方寺に墓所がある。

江戸末期の二十一代当主国司親相（通称、信濃　天保十三年〈一八四二〉～元治元年十一月〈一八六四〉）は長州のために犠牲となった悲劇の人として知られている。親相は若くして家老職に就いたが、幕府への恭順を示すために禁門の変と長州征伐の責任を負わされ、同じく家老の益田親施・福原越後と共に自害した。萩市大字堀内に国司信濃親相旧宅跡が残っており、宇部市万倉の万倉護国神社には親相を讃えた国司公顕彰碑がある。

山口県立文書館には、国司家文書三八一点が収蔵されている。[7]データベースの項目「年代」には「近世～大正」とあり、「内容」には「文書群は、大部分が和漢書、図書類で占められるが、江戸時代のものも若干あり、近代以降では、明治期の致誠会関係の文書を含む」と記されている。「国司家和漢」で通し番号が付された和漢書・図書類は二四七点で、写本を少し含むが、ほぼ江戸期の作品であり、物語の類は存しない。幕末から明治維新後にかけて、多くの文書・蔵書が散逸したのであろう。和歌や連歌、『源氏物語』を深く学んだ、教養豊かな毛利氏[8]に古くから仕えた国司氏であるから、文芸関係の書物も数多所蔵していたと思われる。文書の方は、たとえば鈴木徳三氏編『増訂版弘文荘待賈古書目総索引』（八木書店　平成10）によれば、天正・文禄・慶長時代の三十五通が昭和四十八年・五十二年に売りに出されていたのがわかる。他にも、早稲田大学図書館に「毛利家家老国司元武書状」が所蔵され

ているのが確認できた。

他に蔵書印「國司家藏」「萬倉」が確認できたものに、国立国会図書館デジタル化公開資料の元和四年（一六一八）の古活字版『保元物語』（三冊）がある。該本には他に、俳人木村素石の蔵書印「素石園印」「苔香山房之印」「于水艸堂之印」と、フランク・ホーレーの蔵書印「寶玲文庫」も存する。

俳人の木村素石（本名、正幹　天保十四年〈一八四三〉～明治三十六年〈一九〇三〉）は国司氏と同じく萩藩藩士で、維新後は実業家となり三井物産副社長を務めた。一歳違いの国司親相と木村素石にどのような交流があったのかは不明だが、明治維新後、木村素石は親相とのよしみで国司氏の蔵書を譲り受けたのかもしれない。

四、旧蔵者楢崎景海・時太郎について

寄贈者の楢崎時太郎は、明治三十二年（一八九九）に出版された『阿武の鄙風』に編者・出版者として名が記されている。この奥付から、楢崎時太郎が山口県阿武郡萩町第二千三百三十三番屋敷に住していたのがわかる。楢崎時太郎の情報を何か得られないかと萩市立萩図書館に図書館原簿の調査を依頼したが、寄贈年時や経緯は不明とのことであった。次に、楢崎時太郎の素姓を萩博物館に伺ったところ、樋口尚樹副館長から以下のような情報を頂戴した。

○『萩藩給禄帳』[9]文久二年（一八六二）『分限帳』『嘉永改正いろは寄萩藩分限帳』[10]から、時太郎は楢崎数馬の嫡子であり、さらに数馬は源三郎の嫡子であるとわかる。

○『萩藩給禄帳』によると、楢崎源三郎・数馬・時太郎一家は禄高二百石四斗三升二合の萩藩士で、階級は大組である。

○『萩藩給禄帳』文久二年（一八六二）『分限帳』『嘉永改正いろは寄萩藩分限帳』『萩先賢忌辰録』[11]『増補近世防長人名辞典』[12]から、数馬は友之助（介）・五百輔・景海とも称していたのがわかる。

○萩町第二千三百三十三番屋敷は萩市東田町にあたり、『萩先賢忌辰録』の記述と一致する。

御教示いただいた資料『萩先賢忌辰録』『増補近世防長人名辞典』に、楢崎景海（数馬）は明治三十年（一八九七）十一月二十九日没（七十七歳）と記載があるので、生年は文政四年（一八二一）であろうか。俊光寺（萩市北古萩町）に墓がある。「萩北組戸長、五間町小学校長等」[13]を務めた人で、「初め連歌を学び既にして近藤芳樹に従いて国学を修め後に萩にて和歌を享受して門人多し」[14]、「歌集に阿武乃鄙風一巻あり」[15]という。雅号は蘆翁・蘆屋。『阿武の鄙風』は故郷阿武の四季を描いた雅文集で、成立年は不明。父景海の著作を世に残すべく、景海没後、時太郎が出版したとみられる。

景海の和歌は、蜂屋光世編『大江戸倭歌集』巻第四・冬歌・一二八七に見える。

白髭の杜に雪のつもるを
紅に見えし秋葉は冬枯れて雪の花咲くしらひげの森[16]　景海楢崎

親相と景海の接点は和歌である。親相も和歌を詠んでおり、『高田のおしね』という歌集がある。『高田のおしね』は親相没後に景海が編んだものであった。この事情は近藤芳樹による『高田のおしね』跋文に綴られている。

親相はやくより歌をたしなみて、をりにふれよまれし言の葉どもいとおゝかりしかど、物のまぎれにちりうせたりしかば、此集は楢崎景海がしるしもたるよりて撰べるなり。[17]

近藤芳樹（享和元年〈一八〇一〉～明治十三年〈一八八〇〉）は周防の人で、国学者。長州藩の和学方であったが、親相が切腹した元治元年（一八六四）に、藩校明倫館の教官に就いている。親相も景海と同じく近藤芳樹に師事しており、それで二人は親しくなったのであろう。そして萩本はおそらく、親相没後に景海が国司家から譲られたものと思われる。

おわりに

述べてきたように萩本は丹鶴叢書本の転写本であったため、古写本に遡るための手がかりは得られなかった。しかしながら、萩本は国文学研究資料館の「日本古典資料調査データベース」に書写年時を「室町末？」と記載される謎の写本ではあったから、これはこれで成果だといえようか。

『浜松中納言物語』写本には、詳細な書誌が未確認のものが他にも存する。今後も引き続き、『浜松中納言物語』写本の捜索と調査に取り組んでいきたい。

注

（1）拙稿「大阪府立中之島図書館蔵中西文庫本『浜松中納言物語』について」（『広島大学大学院文学研究科論集』第72巻普通号　平成24年12月）。

（2）「浜松中納言物語伝本系統試論」（『鶴見女子大学紀要』第10号　昭42・12）。後に『更科日記浜松中納言物語攷』（武蔵野書院　平1）所収。

(3)松尾聰氏「浜松中納言物語伝本考―本文批評の方法の実例を示すための―」(『学習院大学研究年報』第1号　昭29・12)によるA～Fの六種の分類と、前掲(2)池田氏による甲・乙第一～第四の分類を併記して示す。
(4)朝倉治彦氏監修、第九巻(大空社　平成9)。以下、丹鶴叢書の引用はこれによる。丹鶴叢書本は八冊本で、一巻が上下に分冊されているので( )内に上下の別を記した。
(5)諸本の略号は、『校本』のものを使用した。参照されたい。
(6)『校本』「解説編」八五頁に「底本(稿者注：C系統／第一種の不二文庫蔵小笠原旧蔵本)とF系統諸本との間には、さしたる異文がない。わずかに次のような異同が認められる」とある。
(7)国司家文書については、山口県文書館金谷匡人副館長の御教示による。
(8)毛利氏の文芸活動、特に物語との関わりについては、西本寮子氏「九条稙通の安芸下向」(『日本文学』第49巻4号　平成12)、「宗分「源氏抄」(仮称)成立までの事情―毛利元就との関係を軸として―」(『国語と国文学』第78巻12号　平成13)、「毛利氏一族の文芸活動―和歌・連歌・物語―」(岸田裕之氏編『毛利元就と地域社会』　中国新聞社　平成19)に詳しい。
(9)樹下明紀氏・田村哲夫氏編、マツノ書店、昭和59。
(10)萩郷土文化研究会編、萩市郷土博物館友の会、昭和54。
(11)田中助一氏編、萩市仏教団、昭和45。
(12)吉田祥朔氏、マツノ書店、昭和51。
(13)前掲(11)一四四頁。
(14)前掲(12)一八二頁。
(15)前掲(14)同。
(16)和歌の引用と歌番号は『新編国歌大観』により、私に表記を改めた。『大江戸倭歌集』は安政五年(一八五八)序、安政七年(一八六〇)刊。他に文久三年(一八六三)版本と無刊記本がある。
(17)本文の引用は、堀山久夫氏『国司信濃親相伝』(マツノ書店　昭和39刊、平成7復刻版刊)所収「第七章　国司信濃その人と歌」の「二、歌人としての信濃とその歌・歌集「高田のおしね」(底本は山口県文書館所蔵本)による。傍線部は私に付した。

付記

本稿を成すにあたり、山口県立文書館・萩市立萩図書館・萩博物館の皆様から御教示と御助力を賜りました。心より御礼申し上げます。

本稿は、平成二十五年度科学研究費補助金若手研究(B)研究課題番号25770085「書入を手がかりとした『浜松中納言物語』本文生成過程の研究」による研究成果の一部である。